

『佛教学セミナー』第一〇〇号を迎えて

仏教学会会長　ロバート F. ローズ

今回、記念すべき『佛教学セミナー』第一〇〇号を発行することになりました。

『佛教学セミナー』は大谷大学仏教学会の機関誌として、一九六五年の五月に第一号が発行されましたが、それ以来、年に二回のペースで出版し続けられて、今日に至っています。五十年という長きにわたる継続的発行が、仏教学会の会員や会友の方々の支援と努力なしにあり得なかつたことは、いうまでもありません。そこで最初に、発足以来、雑誌の運営に関わり、様々な形でご支援をいただいた方々に深く感謝したいと思います。

さて、『佛教学セミナー』第一号の冒頭には、「創刊のことば」という一文が掲載されています。それを拝読しますと、そこには明治以降、西洋から学んだ文献研究を中心とする近代仏教学が飛躍的な発展を遂げ、日本の仏教研究が世界的に注目されるようになったこと、さらには大谷大学の諸先輩たちが日本の仏教学の発展に大きく貢献してきたことが、誇りをもって語られています。しかし、それと同時に、過去の栄光の上には決して安住するべきではなく、伝統は大切に継承しつつも、不断の努力をもって仏教の研究を進展させることが学問に携わるものの責務であるという戒めの言葉も述べられています。そしてさらに続けて、常に仏教研究の最先端にあつて、従来の研究を深化させるとともに、新しい課題を発掘し、様々な形で学界に問題提起を行うことこそ、『佛教学セミナー』の使命であるとも

論じられています。このような先学の願いを受け継いで、わたしたちは今後も『佛教学セミナー』をいつそう充実させ発展させていかなければならないことを痛感します。

しかし、『佛教学セミナー』が創刊された五十年前と比べると、日本の仏教研究を取り巻く状況は大きく変化していることも否めません。そして、それらの変化に伴って、仏教に新たな課題が投げかけられていることも事実です。たとえば「いじめ」は今や大きな社会問題になっていますが、その結果、「人間の絆」や「生きる意味」について悩んでいる人々が多くなります。また最近の日本は極端な高齢化社会になりつつありますが、そのような状況のなかで、死にたいしてどう向き合うべきかと、深く考えざるをえない人々も増えています。このような問いに対して、仏教を研究し、仏教について大学で教えるわれわれも、真剣に取り組まざるをえない時代になっています。

このように大きく変化しつつある日本の情勢に応じるため、仏教学科では二〇一三年度より、従来のインド・チベット・中国・日本の四コースの再編に踏み切り、仏教思想・文化美術・現代と仏教の三コースを発足しました。仏教思想コースでは、従来から大切にしてきた仏教の文献学的思想史的研究を、文化美術コースでは南アジアや東アジアの仏教文化や美術を、現代と仏教コースでは現代社会と仏教の接点を、それぞれ学ぶことを目的にしています。今回発行されました『佛教学セミナー』第一〇〇号も、このようなコース改編に伴い、以前から多く掲載されてきた仏教思想に関する論文に加えて、新コースの視点から仏教について考察する、従来とは一味違った論文も掲載しています。このような形で、私たちは今日までの仏教研究の伝統を大切に継承しつつ、仏教が直面している様々な新たな課題に積極的に応答してゆきたいと考えています。